

【第四五回大会公開講演】

## 妖精メリュジーヌとケルトの大女神

ーインド⇨ヨーロッパ神話の視点からー

渡邊 浩司

一 はじめに

ギリシア・ローマ神話、北欧神話、ケルト神話、日本神話などに匹敵する「フランス」神話は、果たして存在するのだろうか？ この問題に対して果敢に取り組んできたのは、一九五〇年にアンリ・ドントランヴェイルが設立した「フランス神話学会」であり、現在もベルナル・セルジャン会長のもとで共同研究が精力的に続けられている。<sup>(1)</sup> 「フランス」神話、つまりフランスに特有の神話は、大半が民間伝承に由来し、その主役は巨人ガルガンチュアと妖精メリュジーヌである。

ユーラシア大陸の西端に位置するフランス本土は、文化の波を長期にわたって何度も経験した。先史時代に続くインド⇨ヨーロッパ時代（ケルト時代）にはガリア人が活躍し、次に「フランス」の名祖となるフランク族が覇権を握るゲルマン時代が来て、キリスト教化の時代がこれに続いた。<sup>(2)</sup> こうしたさまざまな

文化の記憶が層をなして「フランス」神話に残っていることは、妖精メリュジーヌをめぐる伝承を検討することにより明らかになるだろう。

妖精メリュジーヌは中世末期にフランス語で書かれた二編の物語に描かれているが、すでに中世盛期から名もなき不可思議な存在としてフランス各地の伝承に登場している。本稿はインド⇨ヨーロッパ神話の視点から、妖精メリュジーヌの祖型をケルト文化圏に探る試みである。

## 二 「メリュジーヌ型」物語

中世フランス文学の中でメリュジーヌという名の妖精が初めて登場するのは意外に遅く、一三九三年頃にジャン・ダラスが散文で著した『メリュジーヌまたはリュジニヤンの高貴な物語』<sup>(3)</sup>（以下『メリュジーヌ物語』と略記）である。これと本筋のほぼ同じ物語がクードレットによって一四〇一年頃に韻文で著され、<sup>(4)</sup>

それがテューリング・フォン・リンゴルテインゲンによって一四五六年にドイツ語に翻訳され、十五世紀から十六世紀にかけて民衆本の形で広く流布した。<sup>5)</sup>『メリュジーヌ物語』は、フランス西部のポワトゥー地方に実在したリュジニヤン一族の始祖譚であり、始祖妖精メリュジーヌ (Melusine) の名はリュジニヤン (Lusignan) のアナグラムだと考えられている。<sup>6)</sup>ここではジャン・ダラスの散文版を分析の対象とする。

物語の本編で騎士レイモンタンは、伯父のポワティエ伯と一緒に森へ狩りに行き、その最中に猪を仕留めようとして誤って伯父を殺めてしまう。途方に暮れたまま騎行を続けたレイモンタンは、泉の近くで美しい三姉妹に出会う。そして長女にあたるメリュジーヌと結婚して富裕になり、十人の子供に恵まれる。メリュジーヌの息子たちの顔には、妖精の出自を示す動物的な特徴があった。<sup>7)</sup>たとえば六男のジョフロワは、生まれつき一本の歯が口から外に飛び出していたため「大歯のジョフロワ」と呼ばれた。メリュジーヌが開墾と灌漑を行って多くの町を建設していく一方で、成長した息子たちはヨーロッパ各地へ遠征に出かけて武勇で名をあげ、支配者の娘を窮地から救い出して王や公や伯の地位を獲得する。

結婚にあたり、メリュジーヌはレイモンタンに毎週土曜日に彼女の姿を決して見ないよう求めた。ところがある土曜日、久しぶりに訪ねてきた実の兄からメリュジーヌについての悪い噂を聞かされたレイモンタンは、妻の部屋に穴をあけて中を覗い

てしまう。メリュジーヌは水浴中で、上半身は美しい人間女性の姿だったが、腰から下は蛇になっていた。レイモンタンは妻との約束を破ったことを後悔し、激怒して兄を追い返したため、その後しばらくは平穩に過ぎていく。ところがその後、六男ジョフロワが兄弟でただ一人聖職者の道を選んだフロモンをマイユゼの僧院ごと焼き殺すという事件が起きる。その話を聞いて逆上したレイモンタンは妻を皆の前で非難し、「蛇」呼ばわりしてしまう。するとメリュジーヌは蛇に姿を変え、叫び声をあげて鳥のように空中へ飛び去っていく。その後、リュジニヤンの城主が亡くなる三日前には、メリュジーヌが蛇の姿で城の周囲に現れるようになったという。

昔話であれば、異類の姿を覗き見られた時点で妻は夫のもとを去るが、この物語では禁忌の違反が二段階になっている。レイモンタンがメリュジーヌの蛇身を目撃した第一段階ではメリュジーヌは何事もなかったかのように振舞い、その後レイモンタンが彼女を「蛇」呼ばわりした第二段階で別離がやってくる。レイモンタンの意識の中に留められていた妻の神話的な姿である「蛇」を、言葉として発することが、禁忌の決定的な背反となつている。これこそが「物語」と「昔話」の違いであり、『メリュジーヌ物語』には「見るな」のほかに「言うな」の禁忌も加えられているのである。

記紀神話のトヨタマヒメの話を連想させるこのタイプの物語を「メリュジーヌ型」と名づけたのは、フランスの神話学者ジヨ

ルジュ・デユメジル（一八九八―一九八六年）である。デユメジルは『ケンタウロスの問題』（一九二九年）の中でインド神話の天女ウルヴァシーの恋物語を分析し、『メリュジーヌ物語』との類似を指摘した。<sup>(8)</sup>『シャタパタ・ブラーフマナ』によると、天女のウルヴァシーは、人間の王ブルーラヴァスとの結婚にあたり、裸身を見せぬよう求めた。二人は幸せに暮らすのが、天女たちと仲のよかつた半神族のガンダルヴァたちは、ウルヴァシーが人間界に長く留まっていることを快く思わなかつた。そこでガンダルヴァたちは奸計をめぐらせ、ウルヴァシーの寝台につながれていた一匹の雌羊と一匹の子羊を奪うことで、ブルーラヴァスが裸のまま急いで後を追う状況を作り出す。そこへガンダルヴァたちが雷光をひらめかせたため、ウルヴァシーは夫の裸体を目撃して姿を消してしまふ。「見るな」ではなく「見せるな」の禁忌が含まれるこの物語の断片はインド最古の聖典『リグ・ヴェーダ』に見つかるため、最古の「メリュジーヌ型」と考えられている。

「メリュジーヌ型」の物語は、ゲルマン神話の専門家クロード・ルクトゥーが指摘したように、次のような筋書きをたどる。

(一) 主人公が超自然的な存在に出会う。(二) 主人公は超自然的な存在と愛で結ばれ、相手が課した禁忌を守ると約束する。

(三) 主人公はその代わりにさまざまな恩恵を受ける。(四) ある日、主人公が禁忌を破る。(五) 不思議な存在が完全に姿を消してしまふ。<sup>(9)</sup>

### 三 中世盛期のメリュジーヌ譚

ジャン・ダラスは『メリュジーヌ物語』の序で、物語の典拠として年代記や他の書物に触れながら、ポワトゥー地方などで古老たちによって伝えられていた口頭伝承の重要性にも触れている。そして口頭伝承の例として、ラテン語で『皇帝の閑暇』（一一〇九―一一二四年頃）を著したティルベリのゲルウァシウスの名をあげ、エクス・アン・プロヴァンスのルーセ城の奥方の話を略述している。

『皇帝の閑暇』<sup>(10)</sup>第一卷十五章によると、ルーセ城主レイモンはある日、川沿いを騎行中に、儀仗馬にまたがった美しい貴婦人に出会う。貴婦人はレイモンとの結婚に同意するが、決して彼女の裸身を見ないよう求める。結婚後のレイモンは富裕になり、武勇で盛名をさせ、子宝にも恵まれる。しかし長い年月が過ぎたある日、狩猟から戻ったレイモンが、水浴中の妻を覗き見してしまう。すると妻は蛇に変身して水中に姿を消し、二度と夫の前に現れなかつたという。

こうした類話の初期の例は、シトー会士ジョフロワ・ドーセルがラテン語で著した『黙示録注釈』<sup>(11)</sup>（一一八八―一九四四年）の十五番目の説教に認められる。ここで報告されている二つの話のうち一つ目は、ラングル司教区の男が森で出会った美女を妻に迎え、何人かの子供をもうける話である。この女性は

好んで水浴びをしたが、裸身を見られることを嫌い、召使いの女性にすらそれを許さなかった。しかしある日、召使いの女性が好奇心に負けて扉の穴から中を覗くと、風呂の中を動き回っていたのは女性ではなく蛇だった。この話を聞いた夫が妻の部屋へ押し入ると、蛇の姿を見られた妻は姿を消したという。

二つ目の話は、海で水遊びをしていた若者が、陸へ引き上げた女性を妻にする話である。女性は口をきかなかったが、時が経ち、友人から妻の出自を疑われた男は、妻に話をさせようとして妻が溺愛していた息子を短剣で脅す。すると妻は初めて口を開いて夫を非難し、二度と会うことはできないと言って去っていく。つまり女性に沈黙を破らせることが禁忌で、夫はそれに違反したのである。その後、水遊びをしていた息子は母親にさらわれ、消息が分からなくなったという。

中世盛期の「メリュジーヌ型」の例は、ウォルター・マッブがラテン語で著した『宮廷人の閑話』（二一八一〜二一九三年）にも見つかる。その一つが第二部十一に記された、ブリュケイニオグ湖の畔に住むグウェスティン・グウェステイニオグの身に起きた怪異譚である。彼は三夜続けて女性たちが燕麦畑で輪舞しているのを見かけて追いかけたが、彼女たちは湖水の中へ姿を消す。しかし水面下から声が聞こえ、どうすれば彼女たちの一人を捕らえられるのかが分かる。こうして捕らえられた女性はグウェスティンとの結婚に同意するが、決して手綱で彼女を叩かぬよう求める。二人は結婚し、彼女は多くの子供を産ん

だ。しかしある日、夫が手綱で妻を叩くと、妻は子供たちを連れてすぐに湖へ逃げたという。

これに続く第二部十二に出てくるエドリクス・ヴィルデ（野人エドリクス）の話では、狩猟から夜遅く帰る途中、エドリクスは森の外れの大きな家の中で輪舞する貴婦人に一目惚れし、自宅へ連れ帰る。この女性は三日三晩沈黙を守った後、四日目に言葉を発し、彼女の姉妹や故郷について決して触れないよう求めた。二人は結婚し息子をもうけ、多くの歳月が経つ。そしてある日の夜遅く、エドリクスが狩りから戻った時、すぐに妻の姿が見つからなかったために彼女を非難した。その時、妻の姉妹に触れ、そのせいで妻は姿を消してしまう。

さらに第四部九には、妖精メリュジーヌの六番目の息子「大歯のジョフロワ」を彷彿とさせる、「デカ歯のヘンノ」の話が収められている。ヘンノは森の中で見かけた美少女に一目惚れする。その少女はフランス王に嫁ぐため、舟で海上を進むうちに漂着したのだという。ヘンノはこの女性と結婚し、子供たちをもうけた。妻は頻繁に教会に通ったが、さまざまな理由をあげて聖水の祝別式への参列を避けていた。このことに気づいたヘンノの母が、ある日曜日に小さな秘密の穴から嫁の部屋の中を覗き、嫁が龍の姿になって浴槽に入るのを目撃する。ヘンノは母からこの話を聞いて、聖職者を迎えにやる。不意に聖水を振りかけられた妻とその侍女は、飛び跳ねて屋根を突き破り、大きな叫び声をあげながら去っていったという。

このように妖精メリュジーヌに相当する人物が、固有名を持たないとしても、異類婚姻譚のヒロインとして、十二世紀から十三世紀にラテン語で書かれた複数の著作の中に早くも登場している。こうした類話の中で妖精が人間男性に課す禁忌の対象は、女性の裸身や名前、沈黙や馬具など多岐にわたっている。

#### 四 メリュジーヌの神話的な姿

ジャン・ダラスの『メリュジーヌ物語』には、前段として、メリュジーヌの両親の話が記されている。アルバニア（スコットランド）のエリナス王が、森で狩りの最中に美しいプレジーヌと出会うのが物語の発端である。<sup>(15)</sup>二人が結婚することになった時、プレジーヌはエリナスに、彼女が子供を産むことになったら産褥の場を離れるまで彼女の姿を見ないように求めるところがエリナスは、三人の娘メリュジーヌ、メリヨール、パレスティーヌを生んだ妻の姿を見に行ってしまう。約束を破られたプレジーヌは三人の娘を連れて「失われた島」（アヴァロン島）へ行き、娘たちが十五歳になるまで育てる。このように『メリュジーヌ物語』では、人間男性が二世代にわたり、妖精から課された禁忌に違反している。

成長したメリュジーヌを含む三姉妹は、父が禁忌を破ったことを母から教えられると、父を山中に幽閉する。しかし夫を相変わらず愛していたプレジーヌは娘たちの行動に激怒し、罰を

与える。長女のメリュジーヌには、土曜日ごとに下半身が蛇になるが、土曜日に結婚相手が彼女の姿を見なければ、普通の人間女性として生を全うできるという試練を課す。二女のメリヨールにはアルメニアにある堅固な城で、三日三晩眠らずにハイタカの番ができる騎士の到着を待つよう命じる。三女のパレスティーヌには、カニグーの山中で父親の財宝を守らせる。<sup>(17)</sup>

このように三姉妹に与えられた三種類の罰に注目したのが、ジオルジュ・デュメジルの比較神話研究を継承したベルナル・セルジャン（フランス神話学会 現会長）である。デュメジルによると、インド・ヨーロッパ語族は、神聖性・主権性（第一機能）、戦闘性・力強さ（第二機能）、生産性・豊穰性（第三機能）という三つの機能が階層をなして世界を構成しているという考え方を持っていた。この説を受けてセルジャンは、メリュジーヌ三姉妹がインド・ヨーロッパ語族の三機能を分担しあっていると主張した。<sup>(18)</sup>すなわち、メリュジーヌはリュジニヤン一族の始祖となることから「第一機能」を、メリヨールはハイタカの城で騎士の偉業を見届けることから「第二機能」を、パレスティーヌは山中で財宝を守ることから「第三機能」を具現していると考えたのである。

セルジャンがこの説を発表したのは一九九五年だが、著名な中世史家ジャック・ル・ゴフはその二十四年前にメリュジーヌに備わる「母と開拓者」としての側面を強調した。<sup>(19)</sup>『メリュジーヌ物語』の結婚後のメリュジーヌが、開墾と灌漑を行って多く

の町を建設する一方で、十人もの子供をもうけたからである。この側面は、デュメジルが提唱したインド＝ヨーロッパ語族の三機能の中では、生産性や豊穰性に関わる「第三機能」に対応している。しかしながら、メリュジーヌの果たす機能は、「第三機能」のみに限定されるわけではない。

ジャン・ダラス作『メリュジーヌ物語』は人間男性と妖精の異類婚姻譚の典型として捉えられがちである。しかし、物語の三分の二はメリュジーヌの息子たちの武勲・遠征譚に割かれているため、メリュジーヌは偉業を果たす子供たちの母として「第二機能」と関連している。さらにブレジーヌが長女メリュジーヌへ罰を与えるときに、「いずれにせよ、お前からいとも高貴な一族が生まれ、その一族は目覚ましい偉業を成し遂げるだろう」と予言していたことから、メリュジーヌは明らかに「第一機能」も担っている。さらに、結婚後のレイモンダンがメリュジーヌの助言に従って、主君であるポワティエ伯から雄鹿の皮一枚で包囲できる土地をもらう約束を取りつけ、雄鹿の皮から長い糸の帯を作って広大な土地を得るという挿話は、「第一機能」との関連が深い建国儀礼に他ならない。<sup>(21)</sup>

以上のことから、メリュジーヌがデュメジルの提唱したインド＝ヨーロッパ語族の三機能を併せ持つ存在であり、三姉妹の代表格であることが分かる。ここで注目すべきなのはメリュジーヌとその二人の妹の名である。長女メリュジーヌ (MELUSINE) の名に、妹のメリヨール (MELION) とパレスティーンヌ (Palestine)

の名が含まれているのは偶然ではない。<sup>(22)</sup> そもそも「妖精」(フランス語では「フェ (Fee)」、英語では「フェアリー (fairy)」) は、「運命」や「宿命」を意味するラテン語「ファートルム (fatum)」の複数形「ファータ (fata)」に由来するため、「運命の女神」の化身であることを忘れてはならない。

インド＝ヨーロッパ神話の枠内で考えると、運命の女神は三者一組の姿で登場する。ギリシア神話のモイライ (モイラの複数形) の三人は、運命を割り当てるラケシス、運命の糸を紡ぐクロト、運命の糸を断つアトロポスである。これに対応するローマ神話のバルカエ (バルカの複数形) は、ノナ、デクマ、モルタである。<sup>(23)</sup> また北欧神話のノルニル (ノルンの複数形) を構成するウルズ (「なった」)、ヴェルサンデイ (「なる、起こる」)、スクルド (「これから起こる」) はそれぞれ名の語義の通り、過去・現在・未来を定める存在である。

中世末期のフランスで書かれた『メリュジーヌ物語』のルーツは、現在のフランス、スイス、ベルギー、ルクセンブルク、ドイツ西部を含むガリアだと考えられる。そのため、三姉妹の姿で現れる妖精メリュジーヌの雛形を、インド＝ヨーロッパ世界の中でもケルト文化圏に求める必要がある。

## 五 ケルトの大女神

ケルト文化圏は慣例で「大陸のケルト」と「島のケルト」に



分けて議論される。このうちガリアに代表される「大陸のケルト」の文字資料は見つかっていないため、古代ギリシア・ローマの著作家による間接的な証言に頼らなければならない。なかでも重要なのは古代ローマの政治家・軍人カエサルが『ガリア戦記』<sup>(24)</sup>で、紀元前一世紀のガリア人社会を知るための貴重な資料となっている。カエサルの紹介するガリアの主要な神々は、メルクリウス、アポロン、マルス、ユピテル、ミネルヴァの五柱だけであり、ローマ名で記されている。このうち女神はミネルヴァだけで、残りはすべて男神である。

ローマ名の下に隠されているガリアの神々を推測する上で重要な手掛かりとなるのが、「島のケルト」に属するアイルランドやウェールズの神話物語語群である。これらは中世期にキリスト教修道院を文化的な背景として、写本に書き留められた文献である。「大陸のケルト」の古代とは時間的に大きな隔りがあるものの、同じケルト文化圏に属する神話伝承は、長期にわたって生き長らえてきたと考えられる。カエサルがローマ名で列挙したガリアの五柱の神の正体を突き止めるのに最も有効な比較項は、中世アイルランドの神話物語語群に出てくる神族トゥアター・デー・ダナンに属する神々である。

フランスのケルト学者フランソワーズ・ルルーとクリステイアン・ギユイヨンヴァルフによる分析<sup>(25)</sup>から明らかのように、「あらゆる技術の発明者」としてガリアの神々の中で最も崇められていたメルクリウスは、アイルランド神話でサウィルターナハ

(「百芸に通じた」)の異名を持つ万能神ルグに対応している。また「病魔を追い払う」アポロン、「天上の支配権を握る」ユピテル、「戦争をつかさどる」マルスはそれぞれ、トゥアター・デー・ダナン族の医術神ディアン・ケーフト、指導的な立場にある父神のようなダグダ(「善い神」)、戦闘神オグマに相当する。ここで重要なのは、女神として唯一名前のあがるミネルヴァで、「工作と手芸の手ほびきを授ける」というその機能により、アイルランドの女神ブリギッドが想起される。

ブリギッドについての最初期の証言は、九〇〇年頃に成立した語源的な語彙集『コルマクの語彙集』<sup>(26)</sup>にある。それによると、ブリギッドはダグダの娘で、賢明な女性として詩人たちに崇められていた。このブリギッドには同名の二人の姉妹がおり、それぞれ医術と鍛冶と深いつながりがあった。そのためアイルランド人は、すべての女神をブリギッドと呼んでいたという。つまりブリギッドは、アイルランドの男神にとって娘であると同時に姉妹、妻であると同時に母であり、単独の女神でありながら三重化して三人のブリギッドとなっている。

さらにブリギッドの三重化は、一柱の女神の力を単に強調するものではなく、彼女が「詩」「医術」「鍛冶」と関わっていることから考えると、ジョルジュ・デュメジルの提唱したインド・ヨーロッパ語族の三機能を併せ持つ大女神であることを示している(祭司職にかかわる「詩」は「第一機能」、祭司職と技能にかかわる「医術」は「第一機能」と「第三機能」、戦争と工芸

にかかわる「鍛冶」は「第二機能」と「第三機能」を表している。<sup>28</sup>このように、ブリギッドは「諸芸術と原初の神々の母」なのである。この点でブリギッドは、古代インドの大叙事詩『マハーバータ』のドラウパディー（主人公パーンダヴァ五兄弟の共通の妻）を想起させる。<sup>29</sup>

アイルランドの大女神は一柱であるが、その役割に応じて名前を変えながら、さまざまな文献に登場する。<sup>30</sup>先述した通り、ダグダの娘の場合は、三人のブリギッドとなる。エルクワル（おそらくオグマの別名）の妻で、ダグダとの不倫関係からオイングスを生み、後にボイン川と化す場合は、ボアランド（「白い雌牛」）の姿を取る。ミディル（ダグダの兄弟）の妻となった後で生まれ変わり、エオヒド・アレウ王（おそらくダグダが人間化した姿）の妻となる場合は、エーダインとなる。海を住処とする神マナナンの妻となる場合はファン（「ツバメ」）となり、ダグダと共寝をする戦闘女神の場合はモリーガン（「大女王」）の名で現れる。

モリーガンはボドヴやマハという名の女神と同一視されるが、これもまた大女神の三重化にはかならず、戦場でのモリーガンは「カラス」を意味するボドヴの姿をしている。北欧神話のヴァルキューレを思わせる鳥女としてのモリーガンの姿は、夫が「言うな」の禁忌に違反した後、鳥のように空へ飛び立つ妖精メリュジーヌと重なるように思われる。<sup>31</sup>

女神モリーガンが三重化するのと同じく、その三相の一つで

あるマハ自体も、三重化している。ジョルジュ・デュメジルが指摘したように、マハ（「平原」）はインドヨーロッパ語族の三機能に対応する三つの姿で登場している。マハは三つの異なる文献で、アイルランドへの入植者集団の統率者ネウエド（「神聖なる者」）の妻（第一機能）、アルスターに要塞を建設させる女傑（第二機能）、農夫クルンフの妻となり豊作と富をもたらす妖精（第三機能）の姿で登場している。

アイルランドの大女神の名として特に重要なのは、トゥアター・デー・ダナン（「女神ダナの一族」）という神族名に含まれる、ダナまたはアナである。まずアナ（Aná）については、先述した『コルマクの語彙集』に次のように記されている。「アナはアイルランドの神々の母である。神々を養っていたのはアナであり（女神の名「アナ」は豊穣を指す）、語り継がれているように、女神の名がルアハルの西にある《アナの両乳房》のもとになっている。<sup>34</sup>「アナの両乳房」という呼称は、マンスター地方のキラニーのなだらかに傾斜した二つの丘を指し、アナがアイルランド全域に豊穣をもたらす女神であることを示唆している。

またダナ（Dana）の名は、ドン（Don）、ドニエプル（Dniëp）、ドニエストル（Dniestr）、ドナウ（Donau）など、ヨーロッパの主な河川名に残されている。中世ウェールズでは、ダナは神族の母ドーン（Don）としても登場している。神話物語集『マビノギの四つの枝』の第四の枝によると、ドーンには魔術師グウィディオ（「博識」）、ギルヴァエスウイ（「恋する者」）、アマエ



ソン（「偉大な耕作者」）、ゴヴァノン（「偉大な鍛冶師」という名の息子と、娘アランフロッド（「大きな輪」）がいる。アランフロッドの産む二人の息子ダラン・アイル・トン（「波の息子ダラン（海）」とスレイ・スラウ・ゲフェス（「器用な手を持つ金髪の子」）はおそらく双子であり、スレイはアイルランド神話の万能神ルグのウェールズ版である。デュメジルが指摘したように<sup>(36)</sup>、この「ドーン一族」はインド・ヨーロッパ語族の三機能体系をもとに作られている。ウェールズのドーンは、アイルランドのダナ（アナ）と同じケルトの大神女に相当すると思われる。

## 六 おわりに

ここでは「島のケルト」に属する中世期の神話文献を参照しながら、一柱でありながら三重化することの多いケルトの大神女神について考察した。「大陸のケルト」のガリア人は文字資料を残していないが、ローマ征服後のガリア、つまりガロ・ローマ期（紀元前五〇年～五世紀まで）の神々の彫像や碑文が数多く出土している。なかでも注目すべきなのが三者一組の母神像であり、二つのタイプが存在する。一つ目のタイプは三柱の女神が果物の入った籠や豊穡の角などを抱えている彫像であるが、その果物はケルト文化圏で不死や常若を象徴するリンゴである可能性が高い。二つ目のタイプは、生まれたばかりの赤子の身

体を洗い、産着を変えようとしている、乳母としての女神の彫像である。

こうした二つのタイプの母神像についての文字資料が残されていないため、一見しただけでは、インド・ヨーロッパ語族の三機能の中では、作物の生育や子宝に関わる「第三機能」（豊穣性）を表しているように思われるかもしれない。しかし中世フランス文学には、こうしたガロ・ローマ期の母神像の姿を説明してくれる作品が存在する。たとえば、十三世紀末に書かれた『レニエの幼少年期』<sup>(37)</sup>では、主人公レニエが生まれた頃、夜間に訪ねてきた三人の妖精はそれぞれ、レニエに輝かしい運命を約束する。一人目が名だたる国々に対する支配権（第一機能）、二人目が繁栄と恋愛（第三機能）、三人目が偉業と武勇（第二機能）に触れていることは、三人の妖精が三機能を分担していることを表している。こうした三人の妖精の祖型にあたるのが、ガロ・ローマ期の三者一組の母神である。それはさらに、カエサルが『ガリア戦記』の中でガリアの女神として唯一あげているミネルヴァや、「島のケルト」の大神女へとつながっている。

以上のように「島のケルト」に属する中世の神話文献と、「大陸のケルト」に属する古代の彫像の証言を突き合わせて考えると、インド・ヨーロッパ語族の中でも特にケルトの大神女は、元来一柱でありながら三重化して、インド・ヨーロッパ語族の三機能に相当する役割を分担していることが分かる。レイモンドンに富と繁栄をもたらし、武勇を誇る息子たちの母となり、

リユジニヤン一族の始祖妖精となるメリュジーヌは、こうしたケルトの大女神の化身であり、三姉妹の姿を取って物語の世界に姿を見せているのである<sup>38</sup>。

## 付記

本稿は、日本口承文芸学会第四五回大会の初日(二〇二一年六月五日、会場校・高千穂大学)に「妖精モルガーンと妖精メリュジーヌケルトの大女神の化身たち」と題して行った講演の素稿をもとに、その一部を論文として成稿したものである。紙幅の関係で、考察の対象を妖精メリュジーヌだけに限定した。大会実現のためにご尽力下さったみなさんに心より感謝申し上げたい。

## 注

- (1) アンリ・ドントタンヴィルの代表作『フランス神話』(H. Dontenville, *Mythologie française*, Paris, Payot, 1973) を参照。
- (2) フィリップ・ヴァルテール著、渡邊浩司訳「フランス神話」篠田知和基・丸山顕徳編『世界神話伝説大事典』二〇一六 勉誠出版 七七〜八一頁。
- (3) Jean d'Arras, *Méluise ou La Noble histoire de Lusignan*, éd. et trad. de J.-J. Vincensini, Livre de Poche, Lettres gothiques, Paris, 2003. シャン・ダラスはこの物語を、ペリー公ジャン一世(一三四〇〜一四一六年、フランス国王ジャン二世の三男)に捧げている。
- (4) Coudrette, *Le Roman de Méluise ou Histoire de Lusignan*, éd. E. Roach, Klincksieck, Paris, 1982. クードレットは、パルトゥネ領主ギヨーム・ラルシユベックがこの物語の執筆を命じられた。パルトゥネ領主は妖精メリュジーヌの末子ティエリーの子孫として、リユジニヤン一族と結びついていた。この物語には二種類の邦訳がある(森本英夫・傳田久仁子訳『妖精メリュジーヌ伝説』一九九五 現代教養文庫。松村剛訳『メリュジーヌ物語』二〇一〇 講談社学術文庫、初版は一九九六 青土社)。
- (5) テューリング・フォン・リンゴルティンゲンは、フランスの原詩約七千行のうち約四割を削った。このドイツ語版は、辺境伯ルドルフ・フォン・ホーホベルクに捧げられている。民衆本の邦訳は、『クラーベルト滑稽譚 麗わしのメルジーナ』一九八七 国書刊行会所収、藤代幸一訳『麗わしのメルジーナ』。
- (6) メリュジーヌ伝説は、ポワトゥー地方だけでなく、ブルボネ地方、ブルターニュ地方、リュクサンブールなど他の地方や国にも認められる。フランス・グルノーブルの郊外にあるサスナージュの洞窟も、この妖精の住処と考えられてきた(拙稿『妖精メリュジーヌの住処―《サスナージュの洞窟》探訪記』『中央評論』五十三巻一号 二〇〇一 中央大学 一一四〜一二一頁を参照)。
- (7) 下半身が蛇になる母とは違い、子供たちに備わる動物的な特

徴は、色の違う目、大きさの異なる耳、左頬から生えたライオンの脚、一目目や三目目、鼻の上にある毛むくじやらのしみのように、顔に集中している。それは子供たちが逆子で産まれ、人間の姿で生まれる直前に何らかの力が働き、母の神的属性が付与された結果だと、フィリップ・ヴァルテールは推測している (Ph. Walter, *La Fée Mélusine, le serpent et l'oiseau*, Paris, Imago, 2008, p. 224)。

- (8) G. Dumézil, *Le Problème des Centaures. Etude de mythologie comparée indo-européenne*, Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1929, p. 140-152.

- (9) C. Lecouteux, « La structure des légendes mélusiniennes », *Annales E. S. C.*, 1978, p. 294-306. クロード・ルクトゥーは一九八二年の著作『メリュジーヌと「ハクチョウを運れた騎士」』で、「メリュジーヌ型」の筋書きを踏まえながら、中世フランスとドイツの作品群をコーパスにして、メリュジーヌとローエングリーンの比較を試みた。超自然的な存在の性別は異なっているが、いずれも人間が禁欲を破った後、異界へ戻っていく (C. Lecouteux, *Mélusine et le chevalier au cygne*, Paris, Payot, 1982)。これに対してロランス・アルフ・ランクネールは一九八四年の著作『中世の妖精』の中で、中世ヨーロッパの妖精物語を二つに分類するために、メリュジーヌとモルガーンを用いた (L. Harf-Lancner, *Les Fées au Moyen Age. Morgane et Mélusine, la naissance des fées*, Paris, Champion, 1984)。この著作は、メリュジーヌ研究史

の中で先駆的な労作である。

- (10) Gervais de Tilbury, *Le Livre des merveilles. Diversissement pour un Empereur* (Troisième partie), traduit et commenté par A. Duchesne, Paris, Les Belles Lettres, 1992, p. 148-150.
- (11) ジョフロワ・ドーセル作『黙示録注釈』の十五番目の説教が収録する二つの話は、フィリップ・ヴァルテール著、渡邊浩司・渡邊裕美子訳『ユーラシアの女性神話—ユーラシア神話試論II』二〇二一 中央大学出版部のコラム (九〜十二頁) を参照。
- (12) ウォルター・マップ著、瀬谷幸男訳『宮廷人の閑話』二〇一四 論創社 一三九頁 (「怪奇な幻影 (幽霊) に ついて」)。
- (13) 同書 一四二〜一四五頁 (「再び同じような怪奇な幻影について」)。
- (14) 同書 二九二〜二九四頁 (「再び同じような幽霊について」)。
- (15) エリナスが目撃したプレジューヌは、「いかなる人魚、妖精やニンフよりも美しい調べで、穏やかに歌っていた」 (Jean d'Arras, *Mélusine*, éd. de J.-J. Vincensini, *op. cit.*, p. 122)。ここでは人魚と妖精とニンフが等価に扱われており、プレジューヌの属性を説明している。プレジューヌが人魚であり、なおかつ「岸辺」近くの泉にいたことは、暗黙のうちにプレジューヌが娘のメリュジーヌと同じく海の妖精であることを示している (Ph. Walter, *La Fée Mélusine*, *op. cit.*, p. 99)。
- (16) Jean d'Arras, *Mélusine*, éd. de J.-J. Vincensini, *op. cit.*, p. 130-133.

- (17) レイモンダンとメリュジースの出会いから始まるクードレットの韻文版では、メリュジースの両親の話は、物語の後半で息子ジョフロワが挑む冒険の中で挿話的に語られている。それは、ジョフロワが巨人クリモー退治のために入った穴の中で発見する、プレジース像を抱える板に記されている。
- (18) B. Sergent, « Cinq études sur Mélusine (Première partie : 1-3) », *Bulletin de la Société de mythologie française*, 177, 1995, p. 27-38 (ici, p. 30-31).
- (19) ジャック・ル・ゴフ著、加納修訳『まっぴーの中世のためにー西洋における時間、労働、そして文化』二〇〇六 白水社 第十六章「母と開拓者としてのメリュジース」。論文初出は、J. Le Goff et E. Le Roy Ladurie, « Mélusine maternelle et défriehuse », *Annales E. S. C.*, 26, 1971, p. 587-622.
- (20) Jean d'Arras, *Mélinesse*, éd. de J.-J. Vincensini, *op. cit.*, p.136.
- (21) このモチーフはカルタゴ建国の話にも認められる。フェニキアのデイードーが雄牛の皮を切り分けて細い紐を作り、それにより囲った土地を手にしたという話である。その土地はギリシア語で「雄牛の皮」を意味するビュルサと名づけられた。『メリュジース物語』では雄牛の代わりに雄鹿の皮が用いられるが、これはジャン・ダラスが古代の著作家から着想を得たのではなく、口頭により伝えられてきた神話伝承を用いたと考えるべきであろう。
- (22) Ph. Walter, « Mélusine », dans : *Dictionnaire des mythes féminins*, sous la direction de P. Brunel, Monaco, Rocher,
- (23) ノナ (Nona) 「九番目」は九ヶ月続く妊娠「デクマ (Decuma) 「十番目」は十ヶ月目に訪れる出産、モルタ (Morta) 「死」はおそらく死産した子供の運命を表している。
- (24) 邦訳はカエサル著、國原吉之助訳『ガリア戦記』一九九四 講談社学術文庫。
- (25) F. Le Roux, et C. Guyonvarc'h, *La société celtique*, Rennes, Ouest-France, 1991, p. 105-116.
- (26) *Sarvas Chornaic, Cornac's Glossary*, translated and annotated by J. O'Donovan, edited with notes and indices by W. Stokes, Culcutta, printed by O. T. Cutter for the Irish archaeological and Celtic society, 1868, p. 23.
- (27) F. Le Roux, et C. Guyonvarc'h, *La société celtique*, *op. cit.*, p.115.
- (28) F. Le Roux, et C. Guyonvarc'h, *La civilisation celtique*, Paris, Payot, 1990, p.136-137.
- (29) パーンドヴァ五兄弟の父にあたる神々(法と正義の神ダルマ、風神ヴァーユ、英雄神インドラ、アシユヴィン双神)は、インドヨーロッパ語族の三機能を代表するヴェーダの神々(ミトラ・ヴァルナ、インドラ、アシユヴィン双神)と同じ伝統に属し、五兄弟が父から三機能を受け継いでいることから、五兄弟共通の妻ドラウバデーは三機能を統合する女神だと考えられる。
- (30) コルで取り上げたアイルランドの女神については、渡邊浩司

「ケルトの女神」松村一男ほか編著『世界女神大事典』二〇一五 原書房 三三四～三八九頁を参照。

- (31) F. Le Roux et C. Guyonvarc'h, *Morrigan, Bodh, Macha. La souveraineté guerrière de l'Irlande*, Rennes, Ogam-Celticum, 1983.

- (32) 中世ヨーロッパの代表的な妖精モルガース（アーサー王の異父姉妹）にも、同じ属性が備わっている。ジェフリー・オヴ・モンマスがラテン語で著した『メルリヌス伝』（一一五〇年頃）（邦訳は瀬谷幸男訳『マーリンの生涯』二〇〇九年 雲堂フェニックス）によると、モルガース（ラテン語名モルゲン）は変身術や飛行術を心得ていたという。インド神話の天女ウルヴァシーも、禁忌を破った夫のもとを去った後に、「水鳥」の姿で蓮池に姿を見せている。

- (33) G. Dumézil, *Mythe et épopée*, t. I, Paris, Gallimard, 1968, p. 602-612.

- (34) *Sanas Chormaic, Cormac's Glossary*, op. cit., p. 4.

- (35) 邦訳は森野聡子編訳『ウェールズ語原典訳 マビノギオン』二〇一九 原書房所収「マビノギの第四の枝」。

- (36) G. Dumézil, *L'oubli de l'homme et l'honneur des dieux*, Paris, Gallimard, 1985, p. 93-111.

- (37) 『レニエの幼少年期』については、前掲書・ヴァルテル『ユーラシアの女性神話』の第一章「豊穡の女神」を参照。

- (38) 三姉妹の姿を取る妖精メリユジースと同じく、妖精モルガースにも三重化するケルトの大女神の名残が認められる。前掲

書・ジェフリー・オヴ・モンマス作『メルリヌス伝』によると、モルガース（ラテン語名モルゲン）はアヴァロン島に住む九人姉妹の長女である。モルゲンの妹たちの名は、モロノエ (Moronoe) ˘ マズエ (Mazoe) ˘ グリテン (Glien) ˘ グリトネア (Ghionea) ˘ タリトン (Gilton) ˘ チュロノエ (Tyronoe) ˘ ティテン (Thien) ˘ テイトン (Thiton) である。フィリップ・ヴァルテルが指摘するように、九人のうちMとGとTで始まる名前が三つずつ並び、それぞれのグループで名前がよく似ているため、九人姉妹はモルゲンが三重化し、かつ反復した姿であると考えられる (Ph. Walter, « Morgane », dans : *Dictionnaire des mythes féminins*, op. cit., p.1361-1366)。

中世ヨーロッパ文字ではさらに、「トリスタン物語」に登場する三人のイズー（アイルランド王妃と王女、および「白い手のイズー」）についても、その雛形としてケルトの大女神を想定することができる（拙稿「西欧中世の韻文《トリスタン物語》におけるイズー像とその原型をめぐって」佐藤清編著『フランスー経済・社会・文化の位相』二〇〇五 中央大学出版部 九七～一二二頁を参照）。

（わたなへ・こうじ／中央大学）